

## 研究結果

本研究は、近代日本と植民地朝鮮における雛祭りを比較、考察することを目的とした。

現在、日本の伝統として認識されている雛祭りは、そもそも明治期以降、欧米向けの輸出用に雛人形が大量生産されたことによって、一般庶民の間にも普及していったと云う側面がある。このように大衆化してきた雛祭りによって、雛人形も時代の要求、時勢の影響を受けるようになり、さまざまな様相を呈してきた。例えば、明治時代には、国民国家建設のための女性国民化の重要な教育手段として活用されるようになる。江戸時代には、高い身分を象徴していた「お内裏雛」が、明治時代には天皇と皇后に置き換えられることに対する様々な言説が起こり、或いは、神功皇后の伝説をひな祭りの起源とした言説などが登場する。その中でも、雛祭りを通して一般家庭で天皇に対する畏敬心を養うことの重要性や、良妻賢母を目指す教育的視点の強調と云った言説から、当時の女性教育の側面を垣間見ることができる。

一方、植民地朝鮮では、1931年を基点として<東亞日報>と<毎日申報>などに、雛祭りの行事や、雛人形に関する報道や記事が多く見られるようになる。東京の女学生が朝鮮の女学生に無償で雛人形を提供したことが、朝鮮に雛人形が入ってきたきっかけである、と云った記述から、当時は、朝鮮総督府の支援の下に、こうした動きが全国的に行われてきたことがわかる。実際には、人形は雛人形製造商連合会が提供し、日本と朝鮮両国で、大々的に人形の歓送式と歓迎式が行われたのである。日本の高位官僚、朝鮮総督婦人をはじめ、朝鮮の高位官僚と王妃の外祖母までが参加したこうした行事を通して、ひな人形は全国の女学校に広がっていった。歓迎式の祝辞から察するに、親孝行の大切さと内鮮融和(内地と朝鮮の融和)を強調している。更には、朝鮮ではかつてひな人形を鑑賞する風習はなかったにもかかわらず、神代から存在した朝鮮の地方の風習として紹介されている。

筆者の調査によると、こうした行事は少なくとも1941年までは続いていた。1931年、満州侵攻の直前に企画された雛人形贈呈式は、その時代の時勢・雰囲気強く反映している。ある意味では、雛人形の神代起源説を通して、朝鮮と日本の内鮮融和の正当性、直接的に天皇崇拝を強要するのではなく、親孝行の精神を利用して、臣民の親である天皇を崇拝することの正当性を示す方法として雛祭りは利用されたと言えるかもしれない。

このように朝鮮で盛んになった雛祭りの行事と雛人形の普及は、その後、満州まで拡大するようになる。

本研究では、東アジアで行事として行われた雛祭りの具体的な実施状況を調査し、雛祭りの共時的な洞察をとおして、帝国が異民族と接するなかで現れるその多様な文化的変容の様相が分かってきた。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

2011年7月24日、アメリカのSOKA University Pacific Basin Research Centerと暁園大アジア文化研究所の共同国際学術大会で、<植民地朝鮮でのひな祭り>というタイトルで口頭発表をする予定である。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)